

c : 4 (8%) d : 4 (8%)
 無 : 35 (70%)
 腺型 A : 33 (66%) B : 4 (8%)
 C : 4 (8%) D : 9 (18%)

結論として、管型はIとII、腺型はAとなり全体の半数以上をしめており、副腺型は70%が無いということより正常顎下腺像は、管型IまたはII、腺型がAの場合がもっとも多いといえる。

今回、描出パターンを分析するため、Subtraction 処理を行うことで、従来の造影像のみによる診断で観察にくかった腺体部も、周囲の骨及び歯を消去することが、かなりはっきりとした像として観察でき、また消去にさいしては、頭部固定装置を用いることで容易に行えた。今後临床上、異常所見を見つける上でSubtraction 処理を用いることは、有効な手段となると思われる。

27. 実験的ラット歯槽骨炎の核医学的検索

前田静一, 郭 東英, 佐野友昭
 後藤邦彦, 大西 隆, 高野英明
 小林光道, 金子昌幸
 (歯科放射線)

ラット顎骨に、実験的に作製した炎症の経日的観察をシンチグラフィで行い、X線所見、軟X線所見、マイクロラジオグラム所見と比較することを目的とした。方法は、ラットの下顎右側 M_1 に直径1/4mm のラウンドバーで、咬合面より髓床底まで穿孔させ、自然感染を惹起させた。観察方法は、1週、2週、4週、6週目にシンチグラフィを行い、別群で得た試料のX線所見、軟X線所見、マイクロラジオグラム所見と形態的に比較した。用いた放射線医薬品は、 $^{99m}\text{Tc-MDP}$ 、 $^{67}\text{Ga-citrate}$ である。マイクロラジオグラムは通法に従って作製した。得られた結果は、
 ①シンチグラフィでは、直後では判定不可能であったが、

3日目より経日的に病変部の取り込みが強くなり、炎症の進行とほぼ一致した所見を示した。

②X線所見では直後から5週目まで病変の存在を認めるものの、細部にわたる観察には不適切であった。

③軟X線写真は、X線写真に比べてきわめて明瞭な所見を呈した。

④マイクロラジオグラフィでは、前者三つに比べ病変の進行状態がより明瞭であった。又細部にわたる観察も、容易であった。

以上の所見から、病変の経日的観察には、シンチグラフィが有用であることが認められた。

28. 頭頸部用 Auto-Tomography 装置の開発と臨床応用

輪島隆博, 田岡賢二, 池田博人
 竹腰光男, 大西 隆*, 金子昌幸*
 (放射線部, 歯科放射線*)

歯科・口腔領域のX線診断の際に断層撮影を追加して診断を必要とする場合がある。しかし一般歯科医院や小規模の診療施設では、専用のX線断層撮影装置を設備として設置することは、種々の状況から考えても、全く困難な状況にある。そこでわれわれは、これらの施設でも容易にX線断層像を得る事を目的として Auto-Tomography の基礎実験、そして臨床応用をおこなって、臨床的に極めて有効であると以前に報告した。今回は以前に基礎実験のなかで指摘された、装置として具備すべき条

件に基づいて、専用装置を開発する事を目的とした。われわれの開発した本装置の主な特徴として、①回転を一定速度にする電動モーターギアの装備、②回転の開始、停止を遠隔操作でできる事、③中心の位置ぎめは椅子の縦、横方向のスライドチャンネルで行える事、④回転中心明示ライトの採用、である。もっとも装置全体としても従来の口腔内X線撮影、デンタルX線装置での口外撮影法を充分できるようにした。以上の条件を満たした試作機の臨床応用は、通常のデンタルX線撮影装置(60kv,